

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K04214

研究課題名(和文)三陸思い出パートナープロジェクトの実際と多面的効果

研究課題名(英文)Implementation and Multi-dimensional Effects of Reminiscence Partner Project in Sanriku District

研究代表者

野村 豊子(NOMURA, TOYOKO)

日本福祉大学・スーパービジョン研究センター・研究フェロー

研究者番号：70305275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：三陸地域において回想法を活用した思い出パートナープロジェクトを実施し、その実際の方法と多面的な効果評価に関し、次の4点に則し検証した。「思い出パートナー養成研修」を高年齢ボランティアの会のメンバー、福祉・医療関係者を対象に継続的に実施し、事前・事後の研修評価を行なった。地域における複数回のグループ回想法及び毎年1回の「思い出語りの会」における参加高齢者の多面的評価を行なった。世代間の交流を含めた回想グループに参加した福祉系専門学校生への教育的効果を検討した。ボランティアグループメンバーの個人ライフレビューを通して、ボランティア活動への志向性と背景、回想法との関連等について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

回想法の個人・個人内面の効果、および、社会的・対人関係的・対外的世界への効果が倫理や価値観の検証を踏まえて改めて指摘され、さらに回想法の活動を長期間にわたり、継続的に担ってきた方達への意義についても多くの点で示唆されるものであった。また、東日本大震災の復興支援が課題である地域における回想法という視点から、介護予防のプログラム・高齢者の生きがい活動・世代間交流等の幅広い領域において、従来の回想法研究では検証が限られていた地域、コミュニティ、居住環境、サポート等についても、様々な指標や方法を用いて検討することを試み、回想法が支援・見守りの実践的方法として展開する可能性を拡げることができた。

研究成果の概要(英文)：The Reminiscence Partner Project applying reminiscence took place in Sanriku District. Its implementation and multi-dimensional effects were examined with respect to the following four components of the project. First, reminiscence partner training was held on a continual basis and was attended by senior volunteer members as well as by welfare and medical personnel. Pre- and post-training evaluation were conducted. Second, we conducted a multi-dimensional evaluation of senior participants of both the group reminiscence sessions in local communities and the reminiscence exchange meeting held once a year. Third, we examined the educational effects on welfare college students participating in reminiscence group sessions featuring intergenerational exchange. Fourthly, through individual life reviews of volunteer group members, we looked into their intentionality, background and motivational aspects of engagement in the volunteer activities of reminiscence.

研究分野：社会福祉学・高齢者福祉

キーワード：回想法 ライフレビュー 高齢者ボランティア 東日本大震災復興支援 アクションリサーチ 多面的効果評価 地域連携 臨床実践の倫理・価値観

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2005年、研究代表者の野村に宮古市における介護予防事業の1つとしてグループ回想法の導入への依頼があり、前提として宮古市の全高齢者人口の5分の1調査を実施し、閉じこもり高齢者の生活実態を検証した。回想機能・回想頻度等について高齢者の生活実態との相関関係を分析すると、肯定的回想合計、回想頻度との関わりでは、外出志向性、健康状態、記憶のレベルを総合して、全体のレベルが低下していない場合には、低下している場合に比べて、肯定的回想合計と回想頻度が増加すること、および、外出志向性と辛い回想の表出が関係している傾向がみられ、回想グループを地域で展開することの意義や方向性が示された。調査の成果を踏まえて、回想法研修と4地区における回想法グループを実施し、ボランティアグループ「もやいの会」が誕生し、三陸思い出パートナープロジェクトの原点となった。

2011年3月に起きた東日本大震災から今に至る回想法の取り組みにおいて、もやいの会は未曾有の天変地異に遭遇しながら、地域の中で高齢者の回想のよき聴き手として活動を展開してきた。回想法の意義と効果に関する先行研究においては、大別して個人・個人内面への効果と社会的・対人関係的・対外世界への効果の2者が挙げられている。現在、我が国において地域における回想法の展開が諸地域で見られる中でありながら、その意義と効果に関しての検証は限られている。今回、15年にわたるもやいの会の原点からの活動を思い出パートナープロジェクトとして新たな視点から見直し、地域における過去・現在・未来をつなぐ回想法の多面的効果の検証を意図した。

2. 研究の目的

「思い出パートナープロジェクト」という地域における回想法の多面的効果に関する本研究のテーマは、次の4点である。第1に、高齢者ボランティアもやいの会メンバーを中心とし、福祉等専門職者、行政職者等の参加による「思い出パートナー養成研修」の意義と効果を検証する。第2に、地域における複数回にわたるグループ回想法、および、年1回の頻度で行った「思い出語りの会」における参加高齢者への意義を詳細に検討する。第3に、研修内容に関する養成プログラムとしての意義に関し、多面的評価を行う。第4に、もやいの会創設時からのメンバー自身のライフレビューを元に、ボランティア活動への志向性・背景要因と関わる回想法の意義の検討である。

3. 研究の方法

地域における回想法の多面的効果の検証を目的として、各種のアクションリサーチを次に示す4点に留意し複合的に行った。1点目はボランティアメンバー、福祉・医療関係者、地域の行政職、福祉を学ぶ学生等の参加による多岐にわたる実践的な研修を実施し、質問紙、個人面接、フォーカスグループを適宜併用し、効果を検証した。研修会では、例えばアートセラピーの専門家や、物忘れカフェの実践者を講師として依頼し、独自の効果も検討に加えた。2点目は、仮設住宅や復興住宅居住の参加高齢者を募り、各地区での少人数による回想グループ、および、毎年各地区から参集して開催する比較的大きな規模の思い出語りの会を実践し、それらの効果を検証した。3点目は、研修内容に関する養成プログラムとしての意義に関し、事前・事後の比較を含めた多面的評価を行った。4点目は、3名のメンバー自身の個人ライフレビューを元に、語りの記述を通してボランティア活動への継続と回想の関係性を検討した。

4. 研究成果

研究成果の詳細な概要については、研究成果報告書「三陸思い出パートナープロジェクトの実際と多面的効果」(2021年3月)に示した。地域における回想法という視点から、介護予防のプログラム・高齢者の生きがい活動・世代間交流等の幅広い領域があり、今後もその領域の拡大や増加が予測されている。従来の回想法研究では検証が限られていた地域、コミュニティ、居住環境、サポート、風土等についても、日常の対人関係に加えて、様々な指標や方法を用いて検討することを試み、回想法を地域という範囲でとらえ直し、支援・見守りの実践的方法としての可能性が示された。以下では、成果のまとめとして、実施した諸研修の方法、基盤となる倫理・価値観の位置づけ、回想法のテーマ・刺激となる道具等に関する知見、参加高齢者に対しての効果、もやいの会のメンバーに対しての効果を書き記す。

(1) 多様な研修の方法の開発と実施について

三陸思い出パートナープロジェクトでは、2016年7月から2019年10月まで、22回の研修を、岩手県宮古市を中心に行った。研修内容は、回想法の基本から応用まで多岐にわたり、もやいの会中心の研修では、理論や知識と共に、介護予防事業参加の高齢者の方々とグループ回想法も含めた実践的な研修を重視した。また、社会福祉協議会、ケアマネージャー等の地域において高齢者ケアに従事する専門職を含めた研修や、世代間交流を意図し学生等の参加を組み入れた研修を実施した。さらに、関係者の協力や支援を得て、見守りに関する他地域の先駆的事例からの学びや、物忘れカフェの展開事例の紹介等について学習する機会となり、回想法の展開を幅広く捉える視点を培うことに役立ったと考える。

(2) 回想を聴く者としての倫理・価値観の重視について

本研究では、「思い出パートナープロジェクト」という地域における回想法の多面的効果に関して、1960年代の米国から始まる回想法に関する研究史の中で、実践方法・技法を重視しながらも、これまで検討が充分ではなかった回想を聴く者としての倫理・価値観について立ち戻ることが念頭に置き、研修会やワークショップにおいて、技法や方法の行い方、用い方等についてどのように活用できるかを分かりやすく伝えるように試みると同時に、一貫して、回想を聴く者としての倫理や留意点を含めた。

回想を語る人の尊厳、語られた人の尊厳を守る根本の倫理的配慮は、聴き手や参加者の専門性が問われると同時に、人として、また、地域と共に暮らす住民として守らなければならないあり方や姿勢の問題までを問いかけており、本研究の活動を通して、専門職だけではなく、地域住民、高齢者の方々への回想法やライフレビューの研修、支援の在り方の基盤として展開できたと考える。

(3) 回想法のテーマ設定・小道具等の具体的方法に関して

回想法のテーマに関して、本研究は従来の研究の再確認に加えて、新たな理解を追加できたと考えられる。同じ市内であっても大きく異なる地域性、人間関係、暮らしを支える生業等や、東日本大震災の激変を境にする差異の背景も含めて検討が必須であった。

テーマでは従来、人生の各発達段階に沿うものが特に女性の高齢者の集まりで活用されることも多いが、被災により家族や身近な方を亡くされた方もおられ、グループの中で人生の特定の時点の回想をテーマとすることは避けた。過去を省みることは喪失感を呼び起こすために、努めて振り返りをしない高齢者の方もおられること明らかであり、本プログラムのような地域で展開するオープングループの性格が強い場合には、メンバー間で負の連鎖が起きること等に極力

留意することが欠かせない。また、震災の出来事を過去完了の過ぎ去った体験として捉えるためには数十年の歳月を要することが、ホロコーストに関するライフレビュー研究からも示唆されている。本研究を通し、過去を回想することは、単に過ぎ去った過去の出来事やその体験を懐かしむものでなく、回想法のテーマは過去・現在・未来をつなぎ、相互に橋を架ける役割を果たすものであることが改めて確認された。

(4) 回想法の多面的効果の検証方法について

本研究では効果検証の手続きとして、内外の先行文献検討を踏まえ、自記式質問紙、グループならびに個人のインタビュー等、質的にも量的にも多様な方法を組み合わせて行った。量的・質的両者の検討を行うことにより、思い出パートナープロジェクトの効果に関して、多面的にアプローチすることで、長年にわたって展開されてきたボランティア活動の実像を立体的に理解することが可能となったと考える。また、評価主体の多様性を研究開始当初から計画的に組み入れることに留意した。具体的には、専門領域を元を実施した重層的な評価、ボランティアの方々による評価、回想グループ参加者の方々による評価、および、回想グループ参加者である学生たちによる評価等を含めて、総合的にプロジェクトの展開過程に沿い設定した。

(5) 参加高齢者に対する効果について

思い出語りの会(毎年1回仮設住宅居住者を含めて市内に在住する高齢者を招待し、グループ回想法を実施する企画)の際に実施した2013年から2016年、2018年の質問紙調査結果、および、思い出語りの会に複数回参加したことがある参加者に対するグループインタビューの結果から、思い出語りの会が参加者にとって楽しいひと時であり、また参加したいと思う場となっていることが明らかとなった。東日本大震災後、会えなかった人と再会できる場となっていたこと、震災によって生活だけでなく環境や社会関係などが大きく変化する中で、思い出語りの会は年に1回であるものの気持ちを晴らす、普段は言えないことが言える場となっている。

参加者の年代に関して80代の高齢者が例年10名~15名前後の参加があるのは、会場までの送迎も主催者で手配し、特定の年代だけでなく多世代の交流ができる場となっている。過去の参加経験に関する結果からは、特に2018年は、2016年に参加した20名が再度参加している。思い出語りの会を継続していくことが、市内の高齢者にとっての楽しみ場、再会の場ともなっており、再び参加したいという意欲につながると考えることができる。一方で、参加者が固定化される一面もあり、より多くの市内の高齢者に参加してもらうためには幅広く参加者を募る工夫が必要となる。

(6) 回想法ボランティアに対する効果について

「中心的活動メンバーの事例分析による活動意向の考察」においては、年代・加入時期の影響や個人差はあるが、回想法の手法・活動メンバー・研究チームとの関わり・居住地域の課題等が、個人やもやいの会の活動継続に多様な刺激になっていることが明らかになった。また「中心メンバーの地域活動状況ならびに生活史上の背景」においては、元々社会的な活動意欲が高く、地域の人的ネットワークが豊かであることが示唆された。職歴と地域のリソースを活かした活動に、もやいの会を通じて新たな学びを得ながら複数の活動を展開している様子が見えてきた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野崎瑞樹、伊波和恵、萩原裕子、本間萌、本山潤一郎、中村将洋、野村豊子
2. 発表標題 三陸思い出パートナープロジェクトの実際と多面的効果（その4）
3. 学会等名 日本老年社会科学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊波和恵、野崎瑞樹、萩原裕子、本間萌、本山潤一郎、野村豊子
2. 発表標題 三陸思い出パートナープロジェクトの実際と多面的効果（その5）
3. 学会等名 日本老年社会科学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊波和恵、野崎瑞樹、萩原裕子、本間萌、本山潤一郎、野村豊子
2. 発表標題 三陸思い出パートナープロジェクトの実際と多面的効果(3)
3. 学会等名 日本老年社会科学会第60回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野崎瑞樹・伊波和恵・萩原裕子・本間萌・本山潤一郎・野村豊子
2. 発表標題 三陸思い出パートナープロジェクトの実際と多面的効果その1
3. 学会等名 日本老年社会科学会第59回
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊波和恵・野崎瑞樹・萩原裕子・本間萌・本山潤一郎・野村豊子
2. 発表標題 三陸思い出パートナープロジェクトの実際と多面的効果その2
3. 学会等名 日本老年社会科学会第59回
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野村豊子・野崎瑞樹・伊波和恵・萩原裕子
2. 発表標題 回想法・ライフレビュー研究史にみる倫理的課題
3. 学会等名 日本老年社会科学会第59回
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野崎瑞樹・伊波和恵・萩原裕子・野村豊子
2. 発表標題 地域活動グループのメンバーシップと継続要因の検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	伊波 和恵 (INAMI KAZUE) (90296294)	東京富士大学・経営学部・教授(移行) (32803)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野崎 瑞樹 (NOZAKI MIZUKI) (90322429)	東北文化学園大学・医療福祉学部・教授 (31310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関